

ICT機器を効果的に活用した国際理解教育の実践

前在中華人民共和国日本国大使館附属北京日本人学校 教諭
富山県氷見市立窪小学校 教諭 増川 凜

キーワード 在外教育施設、中国、国際理解教育、総合的な学習の時間

赴任校の概要（2024年8月26日現在）

学校名：中華人民共和国日本国大使館附属北京日本人学校

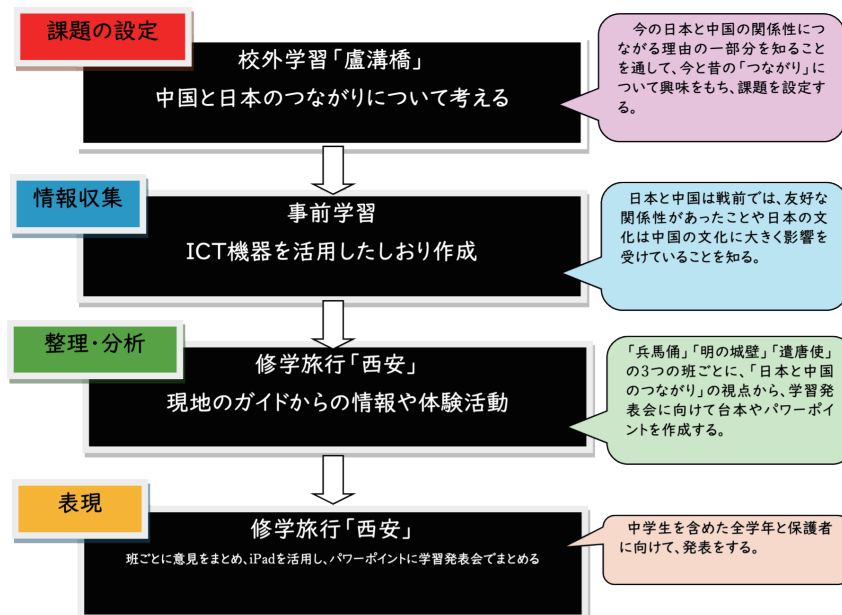
URL：https://jsb-cn.com/

1 はじめに

「日中の懸け橋になる児童の育成」をテーマとしてもち、3年間過ごした。コロナ化の赴任でありなかなか現地交流や現地学習を思ったようにすることができなかった。しかし、3年目にコロナ感染症対策が緩和されたことで、6学年担任の際に修学旅行先の旧京である西安での現地学習をすることができた。中国の歴史を知り、日本と中国の関係性についての問いをもつところから学習が始まった。児童は、1学期に北京市内にある「盧溝橋」に校外学習に行き、日中戦争や「日本人」としての振る舞いについて学習をした。近年の日中の関係など、耳にすることが多く6学年という学齢では、意識するようになってきた。日中の関係性は、どの時代からあったのか。また、日本文化は、中国の文化から影響していることを知り、児童自身が「今自分たちにできることは何か」考えるきっかけを与えた。

また、ICTを活用した学習を取り入れることで、対話的で深い学びをしている姿が見られたこともここで述べたい。

2 学習計画



7月	校外学習「盧溝橋」
9月～	修学旅行に向けた事前学習
10月中旬	修学旅行3日間
～11月下旬	学習発表会に向けての準備
～12月中旬	北京外国語大学附属小学校6学年との交流

3 【課題の設定】校外学習「盧溝橋」（7月）

ICT機器の活用：iPadで来年度の6年生の担任の先生に向けたパンフレットづくり

まだ、歴史を学習していなかった児童に日清戦争について学習する時間を設けた。中学校の社会科の資料集やインターネットを情報源として、事前学習を行った。児童からは「日本と中国の関係が悪くなってきたのは、この戦争がきっかけであることが分かった」「日本人としてのふるまいに気をつけたい」などの感想があった。その中で、校外学習のテーマは、「昔を知り、今に生かそう」となった。

校外学習後のまとめの活動は、新しく日本から来る教員が多い北京日本人学校だからこそ、来年度の6年担任にむけたパンフレットを作成することを目的に行った。児童の感想では、「一体一体の獅子は、そこに来たくさんの人を迎え入れているようでした。実際に橋を渡っている最中、橋が残っていて、風景もきれいだったので、ここでたくさんの人がなくなったことに驚きました。顔がない獅子や大砲の跡もあり、多くの人が亡くなり、苦しい思いをした場所であることを痛感しました。このようなことがあっても、今は私たち日本人が中国で生活できているのは、日本と中国の友好関係をきずくために、努力した人がいるからだと思います。これからも日本と中国が有効な関係でいてほしいと思いました。」と書いてあった。


本校児童は、毎年転入生が多く初めて中国の文化に触れあう児童が多い。中国に対してあまりいい印象もっていない児童中にはいた。また、6学年での歴史では、「戦争」についての学習も始まる。校外学習で「盧溝橋」に行く意味を考えさせ、両国ともにどのような思いがあったのかそれぞれの立場で考える機会になった。修学旅行の「西安」に向けての「課題の設定」の時間を設けた。その際に、現在の「中国と日本とのつながり」と戦前の「中国と日本とのつながり」の違いについて疑問に思う児童が多く、それについての理解が必要であることに気付き、「中国と日本とのつながり」を調査することを課題とした。

4 【情報収集①】修学旅行に向けた事前学習（7月中旬～10月中旬）

ICT機器の活用：チームごとにKeynoteやWordを使ったしおり作成

北京日本人学校小学部6年生の修学旅行は、西安である。家族で旅行に行ることがある児童、「兵馬俑」や「城壁」などの言葉を聞いたことがある児童がいた。西安の歴史についての興味・関心を抱かせるとともに実際に現地を調査する際に、どんな内容について調べ学習を行うのか、考察しているうちに、西安と日本は深いつながりがあることが分かってきた。課題の設定を行う際には、児童たち自身も自ら調べ学習を行い、グループで情報共有し、学習を進めていった。そこで、「兵馬俑」「阿倍仲麻呂記念碑」「明の城壁」の3つの観光地に焦点を絞り、班に分かれて調べ学習を始めた。班の仲間と協力して、インターネットの活用や家族との旅行で聞いた話を元に学習を進めた。それらの観光地について調べてい

事前学習情報



— 遼唐使 —

遼唐使とは、日本が唐に派遣した使節である。日本の史料では唐の皇帝と宛てて「唐使」として記されているが、唐の史料では唐の皇帝宛に宛てて「唐使」として記されている。唐の史料では「唐使」として記されているが、唐の史料では唐の皇帝宛に宛てて「唐使」として記されている。

遼唐使は、唐の皇帝宛に宛てて「唐使」として記されているが、唐の史料では唐の皇帝宛に宛てて「唐使」として記されている。

遼唐使は、唐の皇帝宛に宛てて「唐使」として記されているが、唐の史料では唐の皇帝宛に宛てて「唐使」として記されている。

遼唐使は、唐の皇帝宛に宛てて「唐使」として記されているが、唐の史料では唐の皇帝宛に宛てて「唐使」として記されている。

遼唐使は、唐の皇帝宛に宛てて「唐使」として記されているが、唐の史料では唐の皇帝宛に宛てて「唐使」として記されている。

事前学習レポート

く中で、中国が独自の成長を遂げたその経緯に関心を抱いたり、中国と日本の歴史的背景や伝統文化の共通点・相違点について関心を持ったりする児童がいた。調べた内容は発表やしおりを通して共通理解を図った。

5 【整理・分析】 修学旅行 (10月中旬)

ICT機器の活用: iPadでの写真撮影

兵馬俑博物館、秦の始皇帝陵、大雁塔、阿倍仲麻呂記念碑、明の城壁の訪問、ミニ兵馬俑体験などの直接体験を通して、事前に自ら学んだこと・調べたことがらについて理解を深めた。現地のガイドさんの話を真剣に聞き、一生懸命メモをとる姿や学習発表会での資料作成に向けてiPadで写真をとる姿など、さらに学習を進めようと新たな課題設定を設ける児童や調査をさらに掘り下げようとする児童がいた。



児童作成リーフレット

6 【まとめ・表現】 学習発表会 (11月下旬)

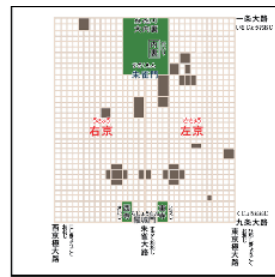
ICT機器の活用: Teamsへの写真アップロードやメモ機能の共有

学習発表会に向け、まとめ作業に取り組んだ。児童は、撮った写真をTeams上の共有フォルダにアップロードをして、そこから必要な写真を取捨選択して資料作成に取り組んだ。「兵馬俑」「阿倍仲麻呂記念碑」「明の城壁」のそれぞれのチームで、それぞれの役やガイドになり、中国と日本の関係性を「歴史」「文化」の面から、劇やクイズを交えながら発表した。また、iPadを活用して、プレゼン資料やメモ機能を使ってお互いに成果物を共有し合いながら、台本を自分たちで完成させた。実際に体験・見学を通して各自が興味関心を持ったことについて自発的に課題設定を行い、考察をふまえ、問題解決に向けて準備を進めた。調査結果を、筋道を立てて順序良く、発表・報告を行った。どのチームも「日本とのつながり」を視点に、発表することができた。

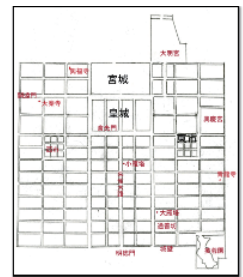
【明の城壁】

西安博物院で、城壁がシルクロードのゴール地点となっており、長安が当時国際都市として発展してきたことを知った。シルクを中心としたヨーロッパの数多くの品物が中国に渡り、さらにそれらが日本にもたらされ、日本の文明の発展に貢献したことなども知ることになる。普段食べている「大根」「みかん」「きゅうり」なども中国を通して、日本に伝わってきたことをクイズにした。

また、中国の都であった長安が、日本の平安時代の平安京や平城京のモデルになっていることなどをから、日本は中国から数々の素晴らしい文化を取り入れ、現在まで発展してきたことを発表した。

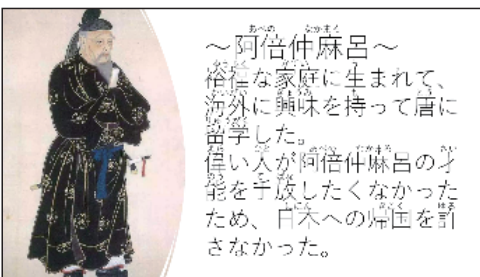


【平安京】



【西安(長安)】

「平安京」と当時「長安」の町並み



児童作成PPT

【遣唐使「阿倍仲麻呂」チーム】

西安で活躍した遣唐使の「阿倍仲麻呂」について、何のために中国に赴き、そこで日本人として何を成し遂げようとしたのかについてまとめた。当時、遣唐使として派遣された仲麻呂は、優秀であったために中国の皇帝に認められたことや阿倍仲麻呂記念碑に記されている短歌の意味や仲麻呂の友人である詩人「李白」の存在なども伝えた。中国に日本語が刻まれている石碑があることや約1300年前は、日本人が中国で学習することが認められていたことから、日中友好な関係性にあったことに気付いた。

【「兵馬俑」チーム】

2200年前青銅器や鉄を使って「兵馬俑」が作られ、秦の始皇帝を中心に争いが起こっていた中、日本は弥生時代で、稲刈りや狩りをして、家族単位での生活をおくっていた時代であり、両国の時代の背景の違いを伝えた。中国の文明が発達していたこと、そして、中国の最新の技術が日本に伝わり、日本も発展を遂げることができたことに気付いた。

2200年前は中国はなにをしてい日本は何をしていた？

3:米作りをしていた。



児童作成PPT

7 おわりに

この学習後、中国への見方が変わった様子が見られた。それが、見られたのは、この学習後に実施した北京外国語大学附属小学校の日本語を専攻している小学6年生との交流会である。両校混合の班で、日中の文化について調査し発表するという共同研究を行った。言葉や文化の壁は、思ったよりも高く戸惑っていた児童も見られた。しかしながら、中国の伝統文化を調べている際に「食べ物でも、日本食と似ている部分がある。醤油などは、遣唐使の時代に中国から伝わってきたからかも」「食べ物の器は、西安博物院で見たものと似ているから、これも中国から伝わってきたものかも」など気付いた児童が多くいた。修学旅行での学習を通して、両国の共通点を見つけるだけでなく、日常生活で何気なく見ていたり使っていたりするものは、中国由来のものであることをさらに深めることができた。1年間に渡る体験活動、交流活動を通して、現地の文化や価値観を理解していくことができた。このような体験をした児童たちは、「日中の懸け橋」となることに期待したい。また、ICT機器の効果的な活用については、写真を撮影する・資料を作成するという過程で、大きく活躍したのは「共有機能」である。同時に作業をすることで、効率的に活動できたり、お互いにアドバイスをし合ったりと、対話が増え、探究していく様子が見られた。

課題としては、3年ぶりの西安への修学旅行のため、修学旅行を経験している教員はいなかった。そのため、「課題設定」「情報収集」「整理分析」「まとめ・発表」の流れを1年間通して行うだけでなく、他教科との横断的なカリキュラムの定着が必要だと考える。